

2020 第51号

千葉支部だより



J・A・C



令和2年10月発行

発行元（公社）日本山岳会千葉支部
〒285-0850

佐倉市西ユーカリが丘 5-12-4 松田方

発行者 松田 宏也

編集者 小川 和敏

E-Mail cib#jac.or.jp

（表紙の絵）「濃溝の滝」

水彩画 小菅 一弘

ご挨拶

千葉支部長 松田 宏也

コロナ禍で私達を取り巻く環境が大きく変わってしまいました。非常事態宣言が解除後も自粛、自粛の生活を余儀なくされ、気が付けば日本の経済は回らなくなり、人との距離と会話も遠くなるばかりです。支部活動も4月以降の山行とサテライト活動の自粛により巣ごもり状態が続いたため、支部だよりも1回休刊せざるを得なくなりました。しかしながら、非常事態宣言が解除されてからは、会員は萎縮することなくwithコロナで少しずつ山行を行なうようになってきました。また、「山の日のつどい」には3密対策をしっかり取りながら講演会を実施することができました。



今回の支部だよりをご覧になっていただければ、いち早くwithコロナで活動を開始した様子が分かると思います。今後の山行計画も目白押しです。コロナの収束にはまだまだ時間がかかると思われますが、自己管理を怠らず、自分に合ったトレーニングを継続しながらwithコロナの登山を楽しみましょう。

「コロナなんぞに負けてたまるか！」です。

なお、今回から支部だよりの編集を小川和敏さんに担当していただいています。よろしくお願いいたします。

神津島・天上山

新井 好夫

山行日（天候）： 3月20日（金）～22日（晴れ）
参加者： 山田紀夫 L、羽藤美代子 SL 小川和敏 三田博 吉田望 柳川しげよ 吉永英明 渡邊信一 中場義則 新井好夫 三田芳江 塩塚生二 12名
タイム： 20日 21時10分竹芝桟橋集合→22時東海汽船大型客船に乗船→
21日 10時 神津島到着→旅館のマイクロバスで黒島登山口へ→登山開始→天上山周遊コース→16時白島登山口着→歩いて旅館着 17時
22日 10時半神津島離島→逆コースにて 20時頃 竹芝桟橋に到着

令和2年3月20日 21時竹芝桟橋ターミナル。メンバー12名が集合し、山田 L の説明とメンバーの自己紹介が行われた後、乗船となる。横浜港を皮切りに大島等の島に寄港しながら、最後の神津島を目指す。大島までは波が少なかったが、その後、部屋の窓ガラスまで波が被るようになった。神津島に到着。宿のバスで黒島登山口まで送ってもらい、いよいよ登山が開始となる。

天上山は標高572メートルで台形の山である。従って、頂上までずーと登りとなる。山は、白い岩と砂が多



日本山岳会千葉支部

く全体的に白が目立つ山である。

頂上を反時計回りに巡り、裏砂漠、表砂漠、不動池、天空の丘等を見学した。途中、新東京百景展望台で昼食を取る。地元の名物のおにぎり弁当を美味しくいただく。天候、快晴で遠く伊豆半島や近くの島が思った以上に近くに見え、見飽きない。

頂上付近の植物は低木が目立つ。動物は鳥類が3種類位で、何箇所か池があったが魚等は見当たらず、途中小さなアリの行列を見ただけであった。下山は、白島下山道を下りる。道はよく整備しており、気持ち良く歩けた。5合目位から下は高い植物も有り、特に緑のトンネルは楽しかった。そして、徒歩で宿まで歩き本日の登山は終了となる。宿では、塩水の温泉そして尾頭付きキンメダイをいただきました。

翌日、海岸通りを散歩していると、水配りのモニュメントがあり、古より水には苦勞していた島と思われる。今回は、コロナウイルスの事もあり、皆さんいつもより沢山お土産を購入していただきました。



50歳未満は入会金と年会費2年間分を免除します！

千葉支部への入会には経験・年齢の制限は設けていません。身近な人で登山経験者や登山を始めてみたい方がいましたらご紹介ください。入会希望者向けの「お試し山行」に参加できます。日本山岳会への入会もご相談に乗ります。特に若い方が入会しやすいように、50歳未満の新入会員は入会金1,000円と2年間の年会費（正会員1,500円または会友3,000円）を免除します。

青梅の低山・赤ぼっこ 三田 博

山行日（天候）：2020年3月15日 晴れ曇り

参加者：三田博（L）、三田芳江、山田紀夫、吉田望、宮崎美智代、三品京子、塩塚生二、梶田義弘・天兵、吉永英明、高橋琢子（11名）

タイム：青梅駅9：20→天祖神社9：55→赤ぼっこ11：30→梅の公園13：00→日向和田駅14：10

「赤ぼっこ」という青梅の可愛らしい名前の山が以前から気になっていた。なんでも関東大震災の時に山の斜面が崩れて赤土が剥き出しになった事から付いた名前だという。青梅駅に集合して登山口の天祖神社へ。拝殿の脇が「長淵山ハイキングコース」の登山口だ。なだらかな山道を1時間ほど登っていくと旧二ツ塚峠、そこから40分ぐらい軽いアップダウンを繰り返して赤ぼっこ

に到着。一本杉の立つ山頂は評判通りの見晴らしの良さだ。奥多摩の山はもちろん、スカイツリーや筑波山、遠く日光連山まで見えた。ここでゆっくり昼食にした。我々以外にも団体さんが登ってきたので場所を交代、先へ進む。帰りに寄った「梅の公園」では、病気で5年ほど前に梅の木を全て伐採したとかで、その後植えた苗木が小さな花を付けていた。



北海道山行

山本 哲夫

トムラウシ山・アポイ岳・羊蹄山登山

2020年7月17日～22日

トムラウシ山 2,141m 遠い山 7月18日（土） 天候 快晴（L）山本哲夫、小川和敏、山田紀夫、野口徹

登山開始4時40分。テント泊の女性二人と前後して登る。5時59分カムイ天上、東にニペソツ岳が樹々の合間から見えた。尾根から右に下りコマドリ沢出合で休憩。7時38分～55分。コマドリ沢の残雪はキックステップで登った。

支尾根から森林限界の岩石地帯を右上し登りきると高山植物の咲く前トム平。9時1分～15分休憩。ロックガーデンを登り岩石帯を慎重に下るとトムラウシ公園9時50分。南沼テント場指定地まで緩やかな登りが続いた。11時1分。山頂の登り。2年前に歩いた残雪と青い南沼、広大な黄金ヶ原からオプタテシケ山・美瑛岳・十勝岳が一望できた。大岩を登りきると静かな山頂。11時37分。東に石狩岳の全容、北に雲に覆れた旭岳。早速お湯を沸かす。小一時間山頂の景観に浸った。12時34分に下山。下りは私だけ北沼経由。北沼と南沼間縦走路は高山植物に池と残雪の手つかずの自然が残されていた。テント泊の女

性がヘルメットにゴプロを着けて歩いてきた。十勝岳分岐着 13 時 31 分。下山方向に人影は見えない。急ぎ下ってトムラウシ



公園の上で皆を発見、合流 13 時 59 分。コマドリ沢で簡易滑り止めを着けて下った。コマドリ沢出合、浄水した冷たい水で鋭気を養う。15 時 35 分-55 分。沢筋を少し下り、最後の登り。カムイ天上から急な尾根を下りきると短縮ルートと古典ルートの分岐 18 時 7 分、登山口 18 時 28 分着。

アポイ岳 810m キタゴヨウ北限を尋ねて 7 月 20 日 天候 霧から晴れ (L) 山本哲夫、小川和敏、山田紀夫、野口徹

7 時 25 分登山開始。樹林帯に入ると直ぐにゴヨウマツの小木が現れた。登山道は山の右斜面を迂回している。急登後、五合目の避難小屋。8 時 43 分-53 分。標高 365m。ここからかんらん岩の尾根、キタゴヨウが沢山自生。7 合目で主尾根に。サマニオトギリが目立った。馬の背。お花畑のトラバース分岐(9 時 50 分)で、ハイマツとキタゴヨウが共存。急な岩尾根を辿る。山頂はダケカンバ帯で見通しが良くない。10 時 25 分。山頂でラーメンとコーヒーを皆で味わった。下山 11 時 31 分。5 合目小屋で休憩。標高の最も低いハイマツを探すと小屋前 7-8m 下に発見した。登山口着 13 時 31 分。下山後アポイ岳ジオパーク

を見学。かんらん岩は、蛇紋岩と同じ赤茶色、マントルが高温で変質せずに固まり様々な鉱物を含むようだ。蛇紋岩は熱水により変質を受けている。国内のかんらん岩は三か所という。ジオパーク見学後、幌満峡に向かった。狭い林道に入ると直ぐに北限キタゴヨウ天然記念物碑に到着。下ると幌満峡かんらん岩露頭と対岸にキタゴヨウが自生していた。林道に戻り、今日の宿新冠に向かった。そこは日高牧場地帯。食後、星空を撮影するとネオワイズ彗星が写っていた。

羊蹄山 1,898m 富士山型火山 7 月 21 日 天候 曇り後強風と雨 (L) 山本哲夫、小川和敏、山田紀夫

3 時 30 起床、新冠からニセコ半月湖の登山口に。登山開始 6 時 44 分。標高 410m、緩やかな登りが続き右に折れると急登、溶岩帯が現れると風穴があった。4 合目 8 時 29 分。ニセコヒラフ山は次第に雲が掛かってきた。5 合目から低木帯に変化。登山路はダケカンバとハイマツのトンネルで風が弱い。7 合目で休憩。9 合目の避難小屋分岐、森林限界を越えると風が強く雨粒も混じった。11 時 34 分。数日前の天気予報通りだ。高山植物が多くなった。火口

分岐では風強く雨も混じった。今回は北峰ピークまで。直ぐに北峰、風の正面に目が開けられない。12 時 9 分。9 合目分岐に戻ると一瞬霧がとれ、半月湖が見えた。時折雨が降る中を慎重に下り駐車場に到着。15 時 56 分。



大菩薩嶺

吉田 望

山行日(天候)：2020 年 7 月 24 日(雲り)
参加者：三品京子(CL)、山口文嗣(SL)、宮崎美智代(会計)、高橋正彦、吉永英明、吉田望(記録)
タイム：JR 塩山駅集合(9:10)上日川峠までタクシー利用 上日川峠(10:10)→福ちゃん荘(10:45)→大菩薩峠(12:00/12:20)→賽の河原(12:35)→雷岩(13:05)→大菩薩嶺(13:35)→雷岩(13:45)→福ちゃん荘(14:45)→上日川峠(15:00)→JR 塩山駅までタクシー利用

今年は梅雨明けが遅く、7 月の半ばすぎとは思えないような快適な山日和であった。緊急事態宣言が解除され初の待ち焦がれた山行であり、千葉支部のメンバーが顔を合わせるのも久しぶり、集まったメンバーの元気な顔を見るとひと安心、嬉しくなった。

コロナ禍のためソーシャルディスタンスを取りつつ登り始める。大菩薩峠に着くと視界が開け大菩薩湖は見え

たが、残念ながら富士山は雲に隠れて見えなかった。賽



の河原を経て山頂へと向かう。大菩薩嶺の山頂は林の中に指標があるだけで山頂らしくなく、大菩薩峠のほうがそれらしい。唐松尾根からの下山途中では、鹿の群れに出会い心を和ませてくれた。

下山後の、お楽しみの反省会は塩山駅前の居酒屋で、全員の無事と三品さんのリーダーデビューを祝して盛り上がり、二次会はあずさ号貸し切りでさらに盛り上がった。

三品さん、お疲れ様でした。これからも頼りにしています。

尾瀬：燧ヶ岳

松田 宏也

山行日(天候)：8月3日：晴のち曇り、4日：晴のち曇り夕方大雨、5日：晴
参加者：L松田宏也、清水義浩
タイム：3日：鳩待峠発 8:50～温泉小屋 13:50
4日：温泉小屋発 7:10～柴安嶺 13:40～祖山 14:15～長蔵小屋 18:20
5日：長蔵小屋発 7:30～三平峠 8:20～一ノ瀬 10:10
大清水 10:40

札幌から単身赴任をしている三角点マニアの清水君(JAC理事)と尾瀬に出かけることになった。彼は尾瀬が初見参。「北海道の尾瀬」と呼ばれ暑寒別岳の麓に広がる雨竜沼湿原に行ったことがある彼は、尾瀬に行きたくてたまらなかったようだ。ようやく来れてうれしいと満面の笑み。今回は尾瀬の全体像をわかってもらえるよう、尾瀬ヶ原から燧ヶ岳を登り尾瀬沼へと下り大清水に抜ける縦断コースをとることにした。

鳩待峠から木道を1時間で山ノ鼻、たおやかな至仏岳を見送り尾瀬ヶ原に入った。天気は良いし時間もある。キンコウカ、コバギボウサ、

シ、サワギキョウ、ヒツジクマルバダケブキに羽を休めるアサギマダラを愛でながら時おり燧ヶ岳に目を移す。今年の5月、残雪の尾瀬ヶ原から燧ヶ岳に登ったことを思い出す。あの時も尾瀬は心地よく私を迎えてくれた。

の宿は温泉小屋だ。尾瀬

今日



で温泉を味わえるとはなんと贅沢。熱い湯でさっぱりと汗を流したあとは、パラソルのある洒落たテラス席で至福の生ビールとなった。

燧ヶ岳への登りは長い。加えて見晴新道は泥道で歩きづらい。木の根っこが濡れて滑りやすい。コロナで運動不足の身体にはこたえる登りだ。ノロノロと柴安嶺(しばやすぐら)を越え、へろへろと尾瀬沼が眼下に見下ろせる三角点のある祖山(まないたぐら)に着くと、今宵の宿の長蔵小屋に「到着は5時過ぎになる」と電話し長い長い下りに入った。

沼の手前で腰を下ろしているご夫婦に遭遇、奥さんがねん挫で動けず救助隊の到着待ちをしているとのことだった。ご夫婦がヘッドランプと水を持っていることを確認し、我々は一足先に下山を始めたが、ザザーの音とともにバケツをひっくり返したようなドシャ降りとなった。ずぶ濡れで長蔵小屋に到着。小屋のガラス戸を引くと小屋主の平野太郎さんが迎えてくれた。翌日、大汗をかきながら一ノ瀬休憩所につくとラッキーなことに大清水まで乗合バスが運行されていた。交通機関は積極利用のポリシーに従い大清水までは楽チンな下山となった。



黒部山行

山田 紀夫

山行期間：2020年8月3日～8月8日、参加者：三田博(L)、三品京子、小川和敏、山田紀夫(Aコース：三田、三品で高天原方面、Bコース：小川、山田で水晶岳方面)

2日目(8/4) 晴れ、折立登山口→五光岩ベンチ→太郎平小屋→薬師沢小屋(泊)

折立から登山道に入ると直ぐに愛知大学の大量遭難を悼んだ慰霊塔があり、そこをとおる展望の無い森を登ると広葉樹から針葉樹の森となる。1871mの三角点からは点々とベンチが現れ最後のベンチが2194mの五光岩ベンチ。ここで三田、三品と合流する。さらになだらかな木道を上れば主稜線上の太郎平小屋に着く。節田氏から紹介された小屋のマスターに挨拶をして、また木道を歩き、左俣出合いへ下るが途中、3カ所も渡渉点があり、やっと宿泊地の薬師沢小屋へ着く。コロナ対策の為、10畳位の二段ベットの部屋に我々4名のみだった。小屋の二階のデッキで、ぼんやりと溪流を眺めながらビールを飲み至

福の時を過ごす。

3日目(8/5) 晴れ、薬師沢小屋→雲の平→雲の平山荘→祖父岳→水晶岳→水晶小屋(泊)

薬師沢小屋を5時50分に出発し小屋前の吊り橋を渡ると直ぐほぼ垂直に近い急坂と樹林帯の中の道は苔むした岩がゴロゴロして息を切らせながら約2時間で急登も終わり木道が始まる。そこからが雲ノ平が始まりトレッキング気分ですぐに水晶岳を見ながらアラスカ庭園そして雲ノ平山荘に着く。ここで高天原山荘を目指す三田、三品と別れる。赤牛岳、水晶岳を展望しながら木道を歩き、祖父岳(2825m)に登り稜線から岩苔乗越、ワリモ北分岐から水晶小屋に着きリュックを下ろし身軽になり水晶岳の岩場にとりつき15時50分水晶岳山頂(2986m)にたつ。この時間帯には雲がかかり「四周すべて山である」の景色は見えず。宿泊地の水晶小屋は最近建て替えられ特にトイレは綺麗。標高2900mにあり北アルプスでは最小の有人小屋でなぜか居心地良かった。生活用水は全て天水だが、その水の旨さは絶品だった。

4 日目 (8/6) 晴れ、水晶小屋→ワリモ岳→鷲羽岳→三俣山荘→黒部五郎山荘 (泊)

水晶小屋を6時に出発。最高の晴天だ。しばらく緩やかに下りワリモ北分岐から少し登ると大岩の重なるワリモ岳 (2888m)。さらに稜線上の山道を行くと鷲羽岳山頂 (2924m)。眼下には鷲羽池、その向こうに槍ヶ岳から穂高連山。明日登る黒部五郎



岳や大きな存在感の薬師岳、昨日登った水晶岳などの山々が周囲に見える。山頂でこれらの景色を見ながら飲んだ珈琲は、最高の味だった。下山道は砂礫の急坂でだらだらと続き1時間ほどで三俣山荘に着く、冷えたサイダーが旨い。ここで、三田、三品と合流し一時間程昼食休憩し、三俣蓮華岳 (昔はこちらを鷲羽岳といった) を左手に見ながら今夜の宿泊地の黒部五郎小屋を目指し、13時50分到着する。早速、小屋前のベンチで冷えたビールで乾杯。目の前に五郎平の草原が広がり、「頂上のカールは大口を開けて雪の白歯を光らせている」黒部五郎岳が大迫力で迫って見える。贅沢な時間を過ごすことが出来た。

5 日目 (8/7) 雨風、黒部五郎小屋→野口五郎岳→北ノ俣岳→太郎平小屋 (泊)

天気は、雨風と最悪。次の太郎平小屋までの行程も標準時間7時間と長い。今朝は小屋を4時45分と早立ちする。外は薄暗く濃い霧が掛かり視界が悪い。歩き初めてしばらくすると小雨が降り始める。予想より早い雨だ。7時14分、黒部五郎岳山頂で4人の集合写真を撮って

いたときはすでに風混じりの雨となっていた。残念ながらあの「眼の下が巨人の手でえぐり取ったように大きく落ち込んだカール」は見えず、直ぐに山頂を離れ朝食の弁当を風雨を避けながら食べた。



それから周囲の景色も一切見えない状態の山道をほとんど休み無く一気に太郎平小屋目指して稜線を駆け歩いた。稜線の左側を歩くとき大風で体温が大きく奪われるのがわかる。山道は細くハイマツが両側に掛かり歩きづらい。岩でゴロゴロした道もある。北俣ノ岳からは一気に下り太郎山を横手に見るとすぐ前は、太郎平小屋だ。たくさんのニコウキスゲが迎えてくれて全員ずぶ濡れだが無事小屋に着くことが出来た。結果として休憩を入れてもほぼ標準時間の7時間半で歩くことが出来た。驚異的だ。やはり、緊急事態だという認識で全員がとにかく進まなければならないという意識が強い共通認識として持てた結果だろう。

「山の日のつどい」49名が参加

8月10日の「山の日」を記念して千葉支部で「山の日のつどい」を千葉市文化センターで開催した。会員会友を中心に49名が参加した。新型コロナ感染対策として、マスク着用、来所時の手指の消毒と検温、講演者のフェイスシールド着用など出来る限りのことを行った。

コロナ禍での山登りについて触れた松田支部長による挨拶の後、出来上がったばかりの「郡界尾根踏査報告書」について山口文嗣副支部長から説明があった。



続いて昨年の秩父宮記念山岳賞を受賞した安間繁樹会員による「人生を決めた西表島」と題する講演があった。山と生き物が好きになった少年時代の思い出から、イリオモテヤマネコや南方研究のエピソードなど楽しい話がたくさんあった。

続いて昨年の秩父宮記念山岳賞を受賞した安間繁樹会員による「人生を決めた西表島」と題する講演があった。山と生き物が好きになった少年時代の思い出から、イリオモテヤマネコや南方研究のエピソードなど楽しい話がたくさんあった。

次に松田支部長による「グレートヒマラヤトラバース 1st ステージ」の踏査報告として、カンチェンジュンガ周辺をトレッキングした様子をスライドを多用して行った。ヒマラヤの雄大な風景の山中での話ばかりでなく、ロックアウトされたカトマンズでの軟禁状態での生活などとても興味深い講演だった。



また会場では、スケッチャートクラブの作品や山岳写真が多数展示された。来場者にはヒマラヤの絵葉書やJACの遠征報告書や今年のウェストン祭の手拭いなどが配布された。



当初予定していた恒例のビールパーティーは、残念ながら中止したが、今後も会員会友が楽しめる千葉支部らしい山の日の独自イベントを行っていきたいと考えている。(三田 博)

郡界尾根踏査報告書を刊行

2014年から4年がかりで房総南部の郡界尾根70[※]を歩いた記録が1冊の本になりました。国土地理院の地図を基に忠実に郡界尾根を全て歩いた記録はこれまでありませんでした。その点でも貴重な踏査報告書となっています。会員会友に有償でお分けしています。B5版32ページ、1冊500円+送料210円=710円。購入希望される方は事務局・三田まで。



宝剣岳・三ノ沢岳

三田 博

参加者：三田博（L）、小川和敏、三品京子、三田芳江、
今井貴朗

山行日：8月21日～22日

昨年9月に木曽駒から空木まで縦走した時に、主稜線の西方向にどーンと聳えていたのが三ノ沢岳だった。その時から気になっていた山を、今回登ることができた。

三品さんに車を出してもらい、都内の渋滞を避けるため早立ちしたので10時前には菅の台駐車場に着いてしまった。バス、ロープウェイを乗り継ぎ千畳敷に上がり、ホテルのレストランでカレーを食べた。千畳敷カール内の花は8月中旬なので少ないようだ。ジグザグな八丁坂をゆっくり歩いて1時間ちよつとで宝剣山荘へ到着。荷物をデポして2956mの木曽駒ヶ岳へ。雲が出てきたがまずまずの天気だ。頂上山荘の前で環境省のレンジャーに会ったので、中アの雷鳥復活活動の状況を聞く。去年はヒナが全滅してしまったので、今年は乗鞍岳から親子3家族をヘリで運んだそうだ。運が良ければ見られるかもと期待して、中岳の巻道を通りキョロキョロしてみたが居なかった。山



荘に戻って部屋に居ると、突然の雷雨でアラレまで降り出した。しかし日没には雨も上がり、綺麗な夕景を見ることができた。翌日は朝食を食べ6時15分に山

荘発。全員ヘルメットをかぶって、宝剣岳の岩場に取り付く。鎖に掴まって慎重に通過、足元が切れ落ちていて高度感があるが、メンバーたちはスリルを楽しむ余裕も。約1時間で宝剣岳を通過し、三ノ沢岳分岐へ。尾根上のいくつかの小ピークを越えながら200m下り、また200mの登り返し。胸まであるハイマツを掻き分けて9時前に2847mの三ノ沢岳山頂に到着した。三角点があるだけで標識は無し、ここまでで会ったのは単独男性2名だけ。思っていた通り、静かな山だ。

一休みしたら、来た道を引き返すのだが、アップダウンが結構きつかった。雷もゴロゴロ鳴り出し、最後の小ピーク手前では雨が降り出した。急いでカッパを着ると、昨日と同じようにアラレまで降ってきた。雷にビビりながら分岐まで戻ると雨が止んだ。ひと安心して極楽平から、人がいっぱい千畳敷へ下ると青空が広がった。時計を見ると、正午を少し過ぎたばかりだった。



四阿山・箆ノ登山

中場 義則

□山行日：2020年8月22日（土）～24日（月）

□天 候：22日晴のち雨、23日晴、24日晴

□宿 泊：日大ワンダーフォーゲル部山小屋

□参加者：松田宏也（L）、坂上光恵、羽藤美代子、宮崎美智代、
古谷清美、中場義則、清水義浩（本部理事）

□タイム：四阿山

鳥居峠登山口（8:03）→孺恋清水（10:50）→四阿山（12:00）昼食休憩（30分）→鳥居峠登山口（15:30）

箆ノ登山

池の平駐車場（8:23）→東箆ノ登山（9:10）→西箆ノ登山（10:10）→東箆ノ登山（11:10）→池の平駐車場（12:00）

*いずれも休憩時間含む

湯ノ丸高原に広がる池の平湿原の散策からスタートしました。

浅間山の噴火によりできた湿原で高山植物の宝庫です。季節は廻ってマツムシソウやウメバチソウ、ワレモコウなどが咲いていました。



翌日は、昨夕から夜半まで降り続いた雨も上がり、いよいよ日本百名山の四阿山に挑みます。鳥居峠駐車場（標高1520m）からの岩ルートに入り、クマ笹の気持ちいい美林帯を緩やかに登ると大きな溶岩の塊の的岩に到着して小休止。木段やガレ場を進むと孺恋清水分岐で頂上まであと1キロ地点です。

日本山岳会千葉支部

根子岳への分岐を過ぎるとすぐに四阿山山頂（標高 2354m）に到着しました。生憎のガスに包まれて眺望はありませんでしたが、頂上を極めた歓びは変わりません。昼食休憩のあと下り始めて嬬恋清水（標高 2179m・関東最高地点の湧水）に立ち寄り、乾いた喉を潤すことができました。途中の東屋から分岐する花童子の宮跡ルートは修験者が利用したと思われる昔ながらの木段が残されていて往時の人たちの様子が偲ばれました。ほどなく鳥居峠駐車場に辿り着いて、標高差約 830m の緩やかで初心者に優しい日本百名山の山旅を終えました。帰宅後、持ち帰った嬬恋清水で美味しいコーヒーをいただきました。最終日は、池の平駐車場から一等三角点のある東麓ノ登山（標高 2228m）と西麓ノ登山（標高 2212m）まで往復しました。

近くの鹿沢温泉に京大山岳部学生が合宿中に作ったという雪山賛歌を讃える碑があります。一定速度で走行すると雪山賛歌のメロディーが流れる嬬恋村メロディーラインでは、「♪雪よ～岩よ～我が宿り～」を口ずさみました。新型コロナウイルス関連で休止していた山行が再開されて良かったです。



編笠山と夏の終わりのコンサート 藤木 亥三六

山行名：ハヶ岳・青年小屋山行
山行日（天候）：8月29日～30日（快晴）
参加者：：松田・藤木・密本&松田の友人3名（小山・武藤・白石）
タイム：29日：11時観音平—15:30 編笠山—青年小屋
16時
30日：8:20 青年小屋—観音平 11:30



8月29日～30日に千葉支部松田支部長主催の青年小屋山行に参加した。

日本各地で猛暑日が連日続き、出発日の29日も快晴、最高気温34度。松田氏と朝6時に佐倉駅で待ち合わせ、途中小淵沢駅で武藤氏をピックアップ、観音平駐車場に10時半到着。

小山氏、白石氏と合流し、11時に観音平から登山開始。私は初ハヶ岳であった。日差しは強いが標高1,580メートルではやはり涼しい。序盤の緩やかな傾斜をゆっくりと進む。8月末の夏の終わりであるが、緑が生い茂り、およそ秋を感じぬ様相であった。そして、押手川の分岐に到着。私は編笠山へのルート、4人は青年小屋への直のルートに分かれた。上へ行くにつれ岩のゴツゴツとした道になる。標高を上げると、次第に南側に南アルプスの眺望が開けてくる。最後の急登を超え、15時30分に編笠山頂上着。山頂はガスに覆われて富士山は拝めなかったが、間近の赤岳は迫力があつた。そし

て、青年小屋へのルートへ行くと、程なくして眼下にはカラフルなテントが所狭しと小屋の奥に張っているのが見えた。大きな岩の数々を越え、青年小屋へ着くと、先程分かれたパーティーも丁度到着、時間は16時。小屋手伝いをしている蜜本氏ともここで合流。1階の和室で一行は腰を下ろし、1杯のビールで乾杯。夕食後は夏の終わりのコンサート。今年で21回目だという。編笠音楽隊という古楽器のバロック音楽、MOTELという夫婦のバンドの演奏に酔いしれ、ワインを片手に聞き入った。宴会もほどほどに22時過ぎには就寝。翌日は7時に朝食を食べ小山氏、白石氏は権現岳を登るため別行動、我々3名は8時20分下山開始。ハヶ岳の自然を味わいながら下山。苔が絨毯のように覆われ美しい。蜜本氏とは、途中の雲海で10時半に合流。11時半に観音駐車場につき、解散となった。



編笠音楽隊

自然学クラブとは・・・

自然学クラブを立ち上げたのは「山の自然についての知識や好奇心を1ランク高めよう」と思ったから。山の好きな人は多い。とても良い事だ。だが、深田百名山の名前は知っていても、その植物が「どうしてその場所に」となると、なかなか難しい。とがった山、平らな山、丸い山…。地形も複雑。自然をよく観察したり、植物の分布の原因や山の成りたちを学ぶことによって地質や気象などに目が向き、自然のつながり山の全体像が見えてくる。今まで知らなかったことが一つでも分かってくると、これまで見えなかったものが見えてくる。せっかく山にいくのだから「何か一つ、学びましょう」。この間、鶴原理想郷、深大寺、昭和の森、国立自然教育園、顔振峠の巡検を実施しています。みなさんもどうぞご参加ください。（三木 雄三）

自然学クラブの巡検

三木 雄三

自然学クラブ第3回巡検、昭和の森カタクリ巡検

自然学クラブは3月29日(日)、千葉市の昭和の森で、カタクリ生息地と「河川争奪」痕跡地形の自然観察会(巡検)を実施した。カタクリは早春植物の代表的な花だが、太平洋側の千葉や西日本に分布するカタクリは、実は寒冷な氷河期から生き延びてきた「生きた化石」。本来の生息地は新潟から秋田付近にかけての雪国で、起源をたどると涼しい気候を好む北方系植物なのだ。

2万年前の地球は最終氷河期ピーク。当時の千葉は北海道十勝地方と同じくらいまで冷え込み、カタクリも関東の太平洋岸や西日本まで南下した。しかし1万年前に氷河期が終了。暖かな気候を嫌うカタクリは①北へ移住②涼しい山へ登ることで存続が可能になった。昭和の森には、こうして生き延びたカタクリが湧き水の出る雑木林の北斜面で、うつむいて恥じらうように咲いていた＝写真。

またここは太平洋、東京湾、印旛沼の3方向に流れる河川の流域でもある。そんな川の流れを変えてしまった「河川争奪」痕跡地形も見学した。河川争奪は、河川の源流のある一部分を別の河川が浸食して元の流れを変えてしまう現象で、楽しい巡検となった。

参加者：大浦陽子、塩塚生二、高橋琢子、竹内進、平出正美、廣村恵美子、杉本正夫、宮崎美智代、山口文嗣、吉野聰、三木雄三(L)。一般参加者は稲川由紀・薫平、坂上貞子。



自然学クラブ第4回巡検、「自然教育園」を巡検

自然学クラブは7月5日(日)、東京・白金台の国立博物館付属「自然教育園」で、かつての武蔵野の草原や雑木林、湿地に生息していた植物などを学ぶ自然見学会を実施した＝写真＝。珍しい「マヤラン」や千葉の山ではお馴染みのスダジイの巨木とも出会えた。400～500年前の豪族の館が同教育園のはじまり。江戸時代は高松藩松平頼重の下屋敷。明治時代は軍部の火薬庫、大正時代は白金御料地と歴史を重ね、一般の人の立ち入りが出来なかったことで都心の開発から守られ、ために貴重で豊かな自然が残されている。

湿地帯では、ちょうどオレンジ色のカンゾウ類が盛り。日本在来の一重のノカンゾウや八重のヤブカンゾウが見事。その花のまわりを黒いアゲハチョウのモンキアゲハがひらひらと舞っていた。

山岡さんが「あらら、いる」と大声。振り向くとハンノキの枝にアオダイショウ。「ギャー、怖い」。だが、これも自然界。ランに詳しい平出さんが「マヤラン」を見つけた。葉と根を持たず地上に姿を現わすのは花だけ。ときどき梅雨の雨が落ちてきた。それもまた良し。中国原産の亜熱帯性植物のシュロが増えているのが近年の都市の姿。「地球温暖化の影響が深刻」とは参加者の弁。

参加者：新井好夫、塩塚生二、中場義則、平出正美、船木元、吉田望、三品京子、山岡磨由子、三木雄三(L)。



こんにちは

山にときめいて

中場 義則

はじめまして、東京都杉並区在住の中場と申します。故郷長崎から高校卒業後上京して、翌年のGWに千葉に住む同級の友から誘われて、蓼科山に登頂したのが山旅の始まりです。山に登らないと撮れない山岳写真を追いかけていて、写真とトライアスロン出場の水泳が趣味です。

これまで、利尻岳、八甲田山、八幡平、那須岳、北岳、甲斐駒ヶ岳、槍ヶ岳、奥穂高岳、白馬岳、空木岳、雲取山、久住山、阿蘇山、宮之浦岳、四阿山など日本百名山51座(2020年8月現在)に登頂しました。今まで一番の山は、南アルプスの鳳凰三山です。薬師岳からの甲府盆地の夜景と富士山のシルエットに加わった赤い満月と宵の明星(金星)の幻想的な美しさは忘れられません。天に突き上げるオベリスク

が象徴的な地藏岳に続く稜線歩きも爽快でした。



日本山岳会千葉支部

千葉支部に入会したのは、2019年6月三つ峠山荘で三木前支部長にお会いして色々とお話させていただいた事がきっかけです。竹馬の友で8年前から山に呼び込んで一緒に登っていた同級が2年前に心臓病で他界してしまい、ずっと落ち込んでいた私の背中を前支部長がそっと押して元気づけてくれました。

ということで千葉支部にお世話になります。いつも明るく元気よく安全に登りたいと思っていますので、どうぞ宜しくお願いします。若さの秘訣である憧れの山にこれからもずっとときめき続けます。



ウォーキングクラブ活動報告 杉本 正夫

ウォーキングクラブ活動報告（2月～4月）

- ① 2月22日(土)9:30～14:30 桜でつなぐ手賀沼と東京湾① 天候 曇
コース：我孫子駅－手賀沼公園－手賀大橋－道の駅しょうなん－ヒドリ橋(大津川河口)－北千葉導水ビジターセンター－柏ふるさと公園－大堀川－松ヶ崎城址(河津桜)－北柏駅
参加者：塩塚、高橋正、香高、新井、永岡、竹園、杉本、7名
- ② 3月22日(日)9:00～14:30 桜でつなぐ手賀沼と東京湾② 天候 曇時々晴
コース：大神宮下駅－船橋大神宮－海老川水門－海老川(桜並木)－北谷津川－船橋運動公園－北谷津川－御滝不動尊(海老川源流の一つ)－新京成線滝不動駅
参加者：高橋正、小林、高橋琢、永岡、宇津木、香高、国宗、稲川母子、杉本、10名
- ③ 以下の計画は新型コロナウイルス感染予防のため中止または延期になりました。
3月28日「江戸川菜の花と野田市街散策」中止
4月18日「桜でつなぐ手賀沼と東京湾③」延期(6月20日実施)
4月25日「筑波学園都市巡り」中止

支部山行の予定

日程	山名	難度	備考	リーダー	締切
10月3日(土)	顔振峠	B	(自然学) 奥武蔵「顔振峠の地滑り地形巡検」	三木	締め切り済み
10月4日(日)	行徳・篠崎地区	W	常夜灯公園・権現通り・影向(ようごう)の松	杉本	締め切り済み
10月10日(土)～12日(月)	秋田・桃洞沢	D	秋田・奥森吉で沢登りとテント泊。沢経験者	三田	締め切り済み
10月16日(金)～17日(土)	御座山・荒船山	B	クルマ1～2台で各登山口からピストン	小川	締め切り済み
10月19日(月)	海老川から花見川	W	海老川河口から花見川河口まで	杉本	10月12日(月)
10月22日(木)～26日(月)	佐渡ヶ島	C	昨春のリベンジで金北山目指します	小川	締め切り済み
10月23日(金)～26日(月)	信越トレイル	C	2018年の続きを踏査。黄葉真っ盛り	松田	締め切り済み
10月31日(土)～1日(日)	只見・布沢大滝沢		中止	三田	
11月3日(火)	黒川鶏冠山	B	柳沢峠から。ジャンボタクシー8名まで	三品	10月25日(日)
11月8日(日)	成田空港・新勝寺③	W	航空博物館から新勝寺	杉本	11月1日(日)
11月8日(日)～9日(月)	浅間隠山と鼻曲山	B	温泉宿泊	松田	10月4日(日)
11月13日(金)～15日(日)	御蔵島		伊豆諸島の山旅シリーズ	山田	10月15日(木)
11月14日(土)	三浦・大楠山	A	三浦半島の最高峰	松田	11月7日(土)
11月21日(土)	筑波山	B	自然学・マグマで出来た骸骨の山	三木	11月11日(水)

日本山岳会千葉支部

11月21日(土)	川苔山	B	電車・バス 徒歩7時間	山本	11月14日(土)
11月22日(日)	手賀沼はぼ一周	W	手賀沼公園から北柏ふるさと公園	杉本	11月15日(日)
11月28日(土)	牛奥ノ雁ヶ腹摺山	B	大菩薩の南、日本一長い名前の山	三田	11月7日(土)
11月28日(土)	湘南アルプス	A	大磯駅から高麗山～湘南平	松田	11月15日(日)
12月4日(金)～5日(土)	乾徳山	C	クサリ場が有名 温泉泊	小川	11月1日(日)
12月5日(土)	JAC 年次晩餐会		中止		
12月6日(日)	房総の沢①	C	小糸川溪谷・沢登り同好会	三田	12月1日(火)
12月6日(日)	三浦アルプス	B	歩き応えのある三浦半島の山	松田	11月22日(日)

☆山行の心得 リーダーは、ガイドや添乗員ではありません。

連れて行ってもらうのではなく自主的な意識を持ち参加してください。リーダーが参加者にそれぞれ役割を振り分けますので、積極的に引き受けてください。参加する前に、山域、コース、交通機関などは地図やガイドブック、ネットなどで十分下調べして下さい。地図・コンパス・筆記用具は、どんな山行でも必ず持って来てください。また、山行に見合った登山保険には必ず入ってきてください。遭難救助付きの保険加入は任意ではなく、すべての登山者の義務です。体調不良者が出れば事故と同じで、山行は中止になり引き返すことになります。日頃の自主トレーニングも行うようにしてください。

リーダーの連絡先	
杉本正夫	支部だよりに記載
松田宏也	支部だよりに記載
三木雄三	支部だよりに記載
三田 博	支部だよりに記載
山口文嗣	支部だよりに記載
山田紀夫	支部だよりに記載
小川和敏	支部だよりに記載
三品京子	支部だよりに記載
山本哲夫	支部だよりに記載

難易度

W ウォーキング

A 整備され歩行2～3時間

B 歩行5時間前後

C 歩行7時間前後、一部岩あり体力要

D 強い体力、岩技術要

E 高い適応能力要、危険度大

(難易度はJAC 日本300名山を参考。岩・沢及び積雪期は難易度アップとする。)

個人山行も計画書提出を

；送信先 chiba_jac@yahoo.co.jp (#を@に)

日程	山 名	難 度	備 考	リーダー	締切
12月7日(月)	手賀川を歩く	W	手賀沼から利根川へ	杉本	11月30日(月)
12月12日(土)	栗ノ木洞	B	自然学・丹沢は海底火山だった	三木	12月2日(水)
12月12日(土)～13日(日)	飯盛山と夏沢鉱泉	B	夏沢鉱泉泊 (X' mas イベントあり) 8名	松田	締め切り済み
12月19日(土)～20日(日)	忘年山行	B	房総の山と恒例の内浦山県民の森宿泊	三田	11月1日(日)
12月21日(月)	真間川を歩く	W	国府台から東京湾へ	杉本	12月13日(日)
12月25日(金)～26日(土)	三頭山	A	都民の森から 檜原村泊	小川	11月15日(日)
12月26日(土)～29日(火)	八ヶ岳	D	硫黄岳、赤岳もしくは阿弥陀岳	松田	10月31日(土)
12月29日(火)	房総の沢②	C	小糸川源流・沢登り同好会	三田	12月20日(日)
1月9日(土)	高宕山と石射太郎	B	高宕観音に初詣	山田	12月28日(月)
1月9日(土)～11日(月)	蔵王		山形蔵王グレンデスキー	松田	11月15日(日)
1月16日(土)	花見川・ポートタワー	W	花見川河口からポートタワーまで	杉本	1月9日(土)
1月17日(日)	房総の沢③	C	志組川から高宕山・沢登り同好会	三田	12月26日(土)
1月23日(土)	六ツ石山	B	奥多摩三大急登をゆっくりと	小川	1月10日(日)

日本山岳会千葉支部

1月24日(日)~25日(月)	日光光徳牧場		クロカンスキー (装備レンタル有)	松田	12月15日(火)
1月30日(土)	大野山	B	丹沢南部・谷峨駅集合	三田	1月17日(日)
2月6日(土)	大岳山	C	奥多摩駅から鋸尾根	小川	1月20日(水)
2月11日(木)	富津・白狐峠	A	フキノトウ探しに白狐集落から	三田	1月31日(日)
2月11日(木)~14日(日)	未定		ゲレンデスキー	松田	12月16日(水)
2月14日(日)	昭和の森一周	W	昭和の森で梅見をして一周します	杉本	2月7日(日)
2月20日(土)	塔ノ岳	C	前回に続き体力測定登山	山田	2月10日(水)
2月23日(火)~24日(水)	八ヶ岳・天狗岳	D	雪山・黒百合ヒュッテ泊	三田	1月20日(水)
2月27日(土)	江戸川河口まで	W	河津桜見ながら土手沿いに	杉本	2月20日(土)
2月27日(土)	陣馬・景信山	B	陣馬山から景信山、奥高尾ハイク	三品	2月18日(木)
3月6日(土)~7日(日)	伊豆大島	B	伊豆諸島の山旅・三原山と椿まつり	山田	2月15日(月)
3月12日(金)~13日(土)	谷川岳	D	雪山・土合山の家に宿泊	三田	2月12日(金)
3月13日(土)	本仁田山	C	奥多摩三大急登をゆっくりと	小川	2月20日(土)
3月21日(日)	江戸川・野田市内	W	今年中止したコースです	杉本	3月14日(日)
3月25日(木)	三頭山	A	都民の森から周回	山本	3月10日(水)
3月28日(日)	高尾山	A	自然学・東京近郊の奇跡の山巡検	三木	3月18日(木)
3月29日(月)	おゆみ野公園巡り	W	一面お花見だらけのコースです	杉本	3月21日(日)

お知らせ

《事務局から》

【役員会報告】

○3月報告 3月18日 ヨシキYYルーム

山行報告 手賀沼 W、赤ぼっこ

山行予定 神津島、海老川 W、昭和の森

年度上期の山行予定、年度テーマ進捗、支部総会関係、コロナ対応、入退会報告

○4月・5月は中止した。

○6月 20・21日 内浦山県民の森

コロナ禍での山行について、支部総会書面議決の報告、郡界報告書の進捗状況、山の日講演会について、

下期の山行予定他、21日鶴原理想郷ハイキング

○7月 15日 ヨシキYYルーム

山行報告 自然学港区自然教育園

山行予定 北海道トムラウシ他、大菩薩嶺、黒部周遊

郡界尾根報告書、山の日をつどい役割分担、全国懇中止、入退会報告他

○8月は中止した。

●会員の動向

《入会・会友》密本織絵(みつもと・おりえ)さん=八街市、森川雅子(もりかわ・まさこ)さん=浦安市、松本さゆり(まつもと・さゆり)さん=横浜市泉区、稲川由紀・薫平(いながわ・ゆき、くんぺい)さん=千葉市緑区、坂上貞子(さかがみ・ていこ)さん=千葉市緑区

《退会》原島正樹さん(12379)、行方正幸さん(10845)

(会友)鈴木さと子さん、青木篤さん、渡邊由一さん

●山行の申込み 申し込みは、原則として電子メールで行ってください。その際には下記事項の記入をお願いします。また山岳保険には必ず加入してきてください。

①氏名②生年月日・年齢③住所、自宅電話番号、携帯電話番号④緊急連絡先氏名(続柄)、緊急連絡先電話番号

※年齢は山行日の年齢です。計画書と違うと保険が効かない可能性があります。

山行によって定員を設けています。技術・体力不足、初参加で力量不明の場合はお断りすることがあります。

「GHT 報告」 義足で歩いた 300 km の山旅

千葉支部長

松田 宏也

グレートヒマラヤトラバースの 1st ステージの山旅に参加してきました。山中 40 泊は辛く厳しい世界でしたが、神々の座を見上げながらの山旅には想像を超える喜びがありました。下山してからは前代未聞のロックダウン、帰国便待ちで 27 日間の軟禁生活に陥りましたが、これもグレートヒマラヤの神様が用意してくれたアメイジングな物語なのでしょう。以下は会報の「山」6 月、7 月号に掲載された GHT の記録概要です。私の山旅の追体験をしていただければ幸いです。



グレート・ヒマラヤ・トラバースは創立 120 周年記念事業の壮大なプロジェクトである。諸先輩たちが挑戦したネパール、インド、パキスタンの高峰の山麓を 6 年間にわたり踏査、地域の変遷調査と探検的登山の実践をしようという試みである。踏査距離はカンチェンジュンガから K2 までの約 5000km に及ぶ。私はその圧倒的なスケール感に魅かれ、「直感」で参加を決めた。会社をリタイア後は千葉支部の仲間と登り続けてきたが、もうひと味なにかが足りない。楽しく山を続けているはずなのに、下山し山を想うたびに私の山登りはこれだけで良いのだろうかと思うようになってきた。それは、このままだとなにか大切な忘れ物をしたまま生きていく人生になるような感じ。

そんな時、私のこころのジグソーパズルのすき間の部分に G・H・T のピースがぴったりと収まりそうな「直感」を感じたのである。私は自分の「直感」を信じることにした。

私は 1982 (昭和 57) 年ミニヤコンカ遭難で九死に一

生を得たものの代償として両手指・両下腿を失った。手指はかろうじて両親指が半分残ったが、両足は膝下 15 センチから失い義足の生活となった。登山の時は 2 本のストックでバランスを取りながら歩く。これまでに義足で多くの山に登った。冬山はもちろん、スキーも楽しむようになった。95 年にはシシャパンマ (8027m) に遠征し最終キャンプ (7430m) まで登った。8000m 峰とはいえ、トレースが見事についており義足には登りやすい山だった。

しかしながら、義足登山を始めて 36 年近くになるが、いまでも義足との接触面の皮膚にキズをつくり苦労する時がある。言ってみれば靴ズレのようなものだが泣きたくなるほど痛い。痛くて痛くてまともに歩けないこともある。夏の暑いときほどソケットの中が蒸れてキズをつくりやすくなるので、専用のソックスを都度交換しなければならない。上りは比較的に歩きやすいが、ガラ場は注意が必要だ。特に下りは転ばぬように一步一步に神経を使うので疲労困憊となる。また体重がいきにかかると足への負担が大きい。

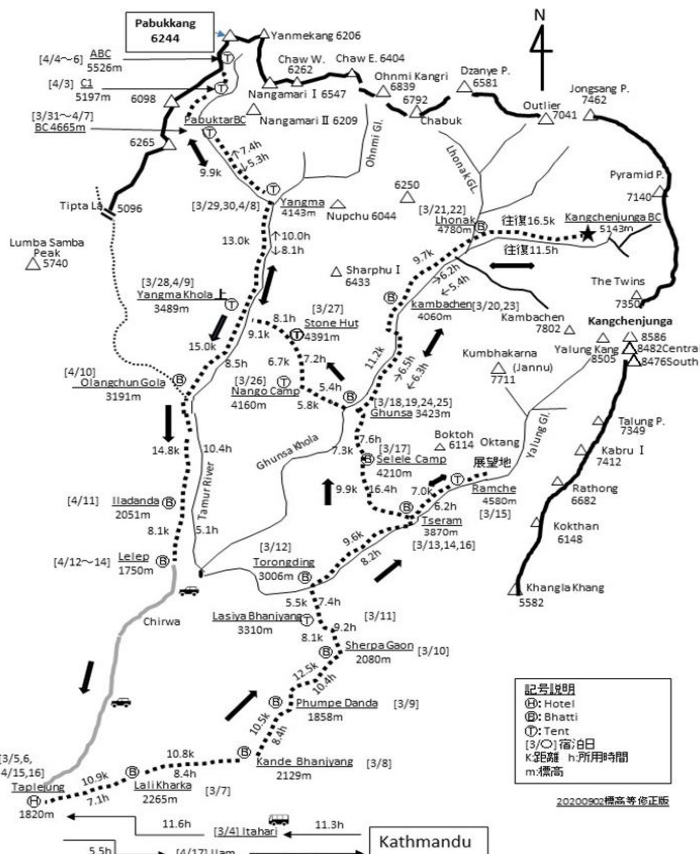
そんな身体で 53 日間の G・H・T 計画が全うできるのか？ 長い、長い、アップダウンを頻繁に繰り返す山道をひとつのキズもつくらずに歩けるのだろうか？ 万一步けなくなった場合はどうするのか？ 「ここから帰ります」ではあまりに無責任だ。G・H・T 計画が私のために途中で断念とかになれば、ごめんなさいで済む問題ではない。不安は次から次へと噴出する。

はたして、私には参加資格はあるのだろうか・・・ヒマラヤ百戦錬磨の重廣さんが一緒であることに少しは安堵するものの、なんとかやるという樂觀と本当に大丈夫なのかという不安がせめぎ合う。一抹の不安は消えることなく浮いたり沈んだりを繰り返す。

けれども、53 日間の山旅にはその不安を凌ぐ喜びがあるはずだとの私の想いが背中を強く押してくれる。ヒマラヤ奥深く、懷に抱かれながら、ひたすら歩き、厳しい大自然と対峙する喜びが私に潜む力を最大限に引き出してくれそうな気がする。いままでの義足登山の経験とグレートヒマラヤが与えてくれる喜びの力、あとは計画完遂の強い意志さえもてばこの長い道中をもしかしたら歩き通せるのではなかろうか・・・

そんな時、妻曰く「64 歳の修行の旅に行ってらっしゃい！」

そうだよなあ、まさに G・H・T は私にとっては修行そのものなんだろうと妻の言葉に妙に納得をする。あとは



自分の可能性を信じこの山旅をここから楽しむだけだ。
さあ、ロングな、ロングな、グレート・ヒマラヤ・トラバース山旅の修行の始まりだ。

2月29日、ソウル経由でネパールへ。3月7日カンチェンジュンガの玄関口であるタブレジュンから義足のグレート・ヒマラヤ・トラバースの第1歩を踏み出した。初日、急坂に沿って連なる民家の間を縫うように石段や畑道を、ときには車道を横切り上り下りを繰り返す。雨の中をラリカルカのバッティ（茶店）に到着。美人の女将と子供が迎えてくれた。

翌日は山腹を巻く車道歩きから始まった。車道を外れ滑りやすい急な石段を慎重に下りきると工事の橋の傍に飯場らしきものがあった。飯場で昼食を済ませ尾根の急登を30分、その後はだらだらと畑道と車道を交互に上りながらカンデバンジャンに着いた。

足の具合は順調かと思われたが情けない事に、はや行動2日目に右足の断端に水泡を作ってしまった。「アチャああ〜」である。断端部分に水泡（魚の浮袋に水を入れたようなもの）が2つもぶら下がっている。化膿止めを塗り、自然に水が抜けるのを待つことにした。経験上、明日の朝には水が抜けるはずだ。義足と断端がフィットせず緩いためにこすれて水泡が出来てしまったようだ。固定のバンドを調整、緩みをおさえ明日に備えた。気にしてもしょうがない。夕方からはトンバ（シコクビエの発酵酒）を飲み気分転換。

9日ブンペダング、10日シェルパガオン、11日ラシアバンジャン、12日トロンデイン

水泡が出来たからといって歩くことをやめるわけにはいかない。うまく手当てをし痛みをそらしながら、ただひたすらショックをかけぬよう静かに歩く。

シェルパガオンからラシアバンジャンは1300mの上りとなる。毎日8~10時間の行動で疲れも溜まってくるが、春を告げるミツマタやサクラソウ？に癒されながら、だんだん奥地に入っていく感覚が嬉しい。食事はバッティで取ったが小屋が狭いため、今回初めてのテント泊となった。

ラシアバンジャンからトロンデインは大崩壊地に残雪が多く残っていた。下りにフィックスロープを張った。もちろん私が張ったのではない。私はハーネス装着にも時間がかかる。こまごまとした作業はお言葉に甘えて、ヘルプを素直に受け入れるのが得策というものだ。特に山では、できないこと、できても時間がかかること、命にかかわることをしっかりと伝え、ヘルプしてもらうことは肝心なことである。過信しヘルプを遠慮することは大きな失敗を招くことになる。

13日ツェラム、14日ツェラム休養日、15日ラムゼー、16日ツェラム

トロンデインからは川沿いの歩きやすい石畳だ。大きなシャクナゲの林を過ぎ徐々に高度を稼ぐ。今日は800mの上り。そろそろかなと思う頃にヘリポートのあるツェラムに着いた。若い女性二人が切り盛りしている。綺麗な

テーブルとイス、夕食はダルバートと書いていたら驚くことにオムライスではないか！ケチャップ、コショウ、さらにナブキンまで置いてある。なんとも贅沢で幸せな気分になる。ヒマラヤの三ツ星レストランとはち言い過ぎか？トンバは標高とともに250RS→300RS→400RSと値上がりしてきたが、まあ三ツ星ゆえに仕方なかろう。疲れた体にお湯のお代わりをして飲むトンバは皆のお気に入りとなった。標高が上がり(3870m)冷え込みが一段と厳しくなってきた。夕食後には雪が降り始めた。

休養日明けはカンチェンジュンガ南面が展望できるラムゼー(4580m)にヤク糞を避けながら我々3人分のテントが設営された。テントを荷揚げしてくれたポーター達はツェラムに下りたので今夜は3人だけの静かな夜だ。テントから顔をだせば、満天の星にうっとり。

翌日はカンチェンジュンガ南面の展望地に向かう。展望地では84年カンチェンジュンガ縦走の話当事者である重廣さんから、山を目前に何うことができた。36年も前に計画され実行された8000m峰の縦走・・・当時の岳人たちの半端ない情熱に思いをはせながらツェラムへの道を下った。



松田の足を治療する
“重廣ドクター”
トロンデインにて

ラムゼー展望台からカンチェンジュンガ南面



17日セレレキャンプ、18日グンサ、19日グンサ休養日

今日の行程は長いことから6時にツェラムを出発した。小屋の裏手からいきなり標高差1000mの急登が始まる。急登が落ち着くと山腹を巻きながら徐々に高度を上げていく。シニオン・ラあたりからは雪がでてきたのでタイトロープで慎重に進む。ジャヌーの展望地であるミルギン・ラは残念ながらガスっており展望なし。北面側の下り急斜面からは残雪が多くなってきた。

膝から腰、場所によっては胸近くまでありズボズボと歩きづらい事この上ない。ストックも埋まるのでバランスが取れず私は尻もちをついてばかりだ。セレレ・ラに着くころには陽が沈みかけた。今日の宿のセレレキャンプまではまだまだだ。ヘッドランプをつけて雪に足を取られながらも下りていくがなかなか進まない。先頭に行く重廣さんを追いかけるように進むがペースは上がらない。まだかまだか・・・もうすぐだろうと思うが一向に着かない。焦りが出始めたころ、闇のなかにポーター達の迎えの灯りが見えてきた。熱く甘いミルクティが疲れを癒してくれる。でも、まだここから宿まで1時間半はかかる。

るとのこと。まだあんの？とガックリであるが仕方ない。気を取り直し、なにも考えずにヘッドランプの灯りに照らされる山道をとにかく歩く。やっとの思いでセレレキャンプの宿に着いたのは23時に近かった。なんと17時間の行動であった。とにかく疲れた。クタクタだ。飯は喉を通りそうもないのでミルクティをたっぷり飲みシュラフに潜り込んだ。それにしてもよく歩いたもんだ。自分ながら感心してしまった。



ツェラムを出発、雪の中ミルギン・ラを目指す

昨夜はぐっすりと眠れて目覚めが良い。疲れが取れているようだ。天気もよく気持ちの良い朝だ。今日は通信もできる大きな村のグンサまでだ。8時にセレレキャンプを出発、峠からグンサに下りる沢筋には雪が多く残っていた。腐った雪に足が取られる。そのたびに尻もちをつきヨイショと起き上がる。何度か繰り返しているうちにグンサの台地につき、ミルクティを持参したポーターと合流した。

20日カンパチェン、21日ローナク、22日ローナク⇄カンチBC、23日カンパチェン

今日からはカンチェンジュンガ北面BCを往復し

5日後にグンサに戻る予定だ。

昨夜の雪でグンサは白一色となった。村からは左岸沿いの歩きやすい水平道だ。見上げると左岸には連続する屏風のように岩壁が立ちはだかっている。仙人が修行したという大岩から樹林帯を抜け崩壊地のガラ場を過ぎると立派な吊り橋に着く。吊り橋を渡り少し行くと怪峰ジャヌーが見えたが、すぐに雲に隠れてしまった。村の入口の門をくぐるとカンパチェンの新しいロッジはもうすぐだ。

ローナクまでは右岸沿いに大崩落地を越えていく。

無人小屋のあるラムタンで昼食。180度に広がる紺碧の大空間の麓から、岩壁、雪壁、氷壁、懸垂氷河、ヒマラヤ壁を纏った巨峰がにょきっと立ち並ぶさまは圧巻のひとことである。

22日はカンチェンジュンガ北面BCまでの往復である。標高は5000mラインを突破する。歩きやすい平原を過ぎガラ場、泥壁を越え、平坦地で休憩をとるが、どうも身体が重い。力がいまいち入らない、頭痛も少し感じる。過去の高所経験でも5000mラインで同様の経験をしたことがある。あと1時間ほどでBCだが復路もあるので無理は禁物である。重廣さん、吉井さんを見送り、私とポーター二人は一足お先にここから引き返すことにした。ローナクに戻ると頭痛は治まった。



夕映えのジャヌー（クンパカルナ）カンパチェンにて

24日グンサ、25日グンサ休養日

グンサへ下る途中、ラジオ放送で東京

オリンピック・パラリンピック延期とネパール全土にロックダウンが発令されたことを知った。コロナ感染者がアメリカ、イタリア、スペインで何十万人とのニュースを聞いてもピンとこない。コロナで世界中がひっくり返っているとはつゆ知らず、なんだかSF映画の宣伝を聞いているようだった。

グンサを後に我々は計画通り踏査とチベット国境の未踏峰アタックに向かうが、世の中が大混乱の事態になったことを実感するのは3週間後タブレジュンに到着してからであった。

26日ナンゴーキャンプ、27日ストーンハット、28日ヤンマコーラ上

昨日はラマ僧を呼びブジャ（安全祈願）を受け、栄養補給のためにヤギ1頭を買い皆で平らげた。今日からは最奥の村ヤンマを経て未踏峰のパブクカンを目指す。新たな気持ちでナンゴー・ラの道に入った。記念碑を過ぎ急登を登りきると眺望の良いカールにあるナンゴーキャンプに出た。最近建てられたらしい小屋もある。水も引かれており快適なキャンプサイトでのテント泊となった。

ナンゴー・ラまでは約600mの上りだ。峠の手前からは雪がでてきた。スムーズな荷上げのためにグンサで雇った5頭のヤクは峠の雪に動けず、荷を置いて引き返してしまった。峠からはトレースがあるものの膝から腰までの雪に足をとられペースはあがらない。右足にキズを作ってしまう遅いペースはさらにダウンする。やがてガスの向こうに大岩が見え、その裏手にキッチンテントが現れた。ようやくストーンハットに到着した。峠に置かれた荷はポーターが往復してキャンプへ下した。ポーターの強靱な体力には驚くばかりだ。

好天の朝、深雪で判りにくい道をヤンマコーラへ下る。ヤクに遭遇しながら森を抜けるとランジョンカルカ的小屋だ。石楠花の森を抜けるように下り、橋を渡るとヤンマコーラに出る。今日のテント場まではあと1時間ほどだ。足の痛みに耐えながら川沿いから山道を上ると沢の音が聞こえてきた。石楠花がまだ蕾のテント場では早くもポーターが焚火を囲んでいた。

29日ヤンマ、30日ヤンマ休養日、31日～4/2日パブクタルBC

ヤンマの手前のヌブでテント泊予定であったが、ヌブに着いてみるとポーターの姿もテントも見当たらない。どうやらヌブに早く着き過ぎたのでヤンマまで行ってしまったようだ。ヤンマまでは私の足であと3時間はかかるだろうが、腹を決めて歩くしかない。トボトボと山腹を巻いていくとヤクが群れる平原に大チョルテン、そして正面の丘にゴンパの赤い屋根が見えてきた。やっとの思いで最奥の村ヤンマに辿り着き熱いミルクティにありついた。今日もよく頑張った。



「最奥の村ヤンマ。斜面にゴンパと家屋が見える」

翌日は村長宅を表敬訪問。G・H・Tの目的のひとつである集落の環境変化調査のためのインタビューをおこなった。雪が降れば陸の孤島と化すヤンマの集落は10戸(40名)ほどである。ヤクを育て乳を搾りチーズをつくる。干し肉、毛皮、仔ヤクで交易をし食料、生活物資を手に入れる。猫の額ほどの畑でとれるのは小さなジャガイモくらいだ。過酷すぎる自然環境のなかで、土地を去ることもせず先祖代々の文化を継いできたヤンマの村人。85頭のヤクのおかげで村長の孫はカトマンズの学校に留学しているという。生命力の強靱さと生活力のたくましがひしひしと伝わって来た。

31日ヤンマから湖(チェチュポカリ)の左岸を行き、先発隊が設営しているベースキャンプを目指す。平坦地から大岩方向に登っていくとカラフルなテントが現れた。水場が近く風も防げる絶好のキャンプサイトだ。



「快適なBC／緑は食堂、黄色はキッチンテント」

翌日、早朝から賑やかな声が聞こえてきた。ポーターたちが石を積上げ、タルチョを張り、安全祈願の祭壇を作っている。祭壇には拾ってきたブルーシープの立派な角が飾ってある。

護摩の煙が青空に広がる。お神酒をいただき掛け声と

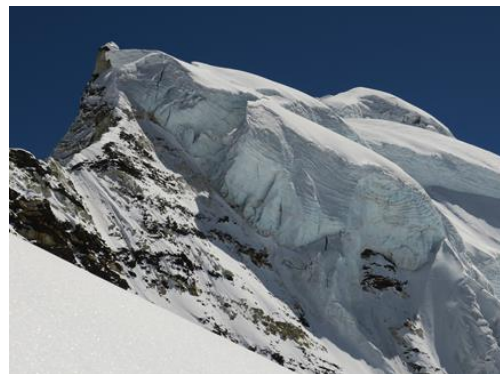
もに米を宙に高く撒き、ベースキャンプ開きの儀式を終えた。

2日はアタック隊の荷づくりをおこなった。アタック隊は重廣さん、吉井さん、シェルパのラムカジの3名である。私はBCキーパーだ。上部は雪が多くラッセルを強いられ、またザイルを使う箇所も多いはずだ。私の実力では到底無理だろう。未踏峰に挑戦できなくても後悔はない。それよりもあと残りわずかで完遂できるG・H・Tに全力をあげることに私にとっては大きな挑戦であり最大の目標であった。

アタック隊の行動概要は以下のとおりである。

3日C1(5197m)、4日ABC(5526m)、5日、ABC⇄5798m
地点、6日ABC⇄5920m、7日BC

「雪でガン・ラに向かうルートが判明せず軌道修正を行う。ナンガマリ西面を右手に見ながら北上し5197mにC1建設。4日相変わらずルートは判り難い、5526mにABC建設。5日ABCの左手岩壁帯の中にあるはずのガン・ラへのヤク道が発見できず岩壁帯の裾をトラバース、ミックス壁を登り上部プラトーへ。さらに雪原を東に進み頂上に向かうルートを確認しABCに戻る。本日の到達点は5798m。6日暗いうちにABCを出発。ラッセル深く進まない。昨日の到達点から雪原を北西に進み、雪稜にフィックスロープ2P(100m)使用するが、更に上部は岩壁帯と懸垂氷河が往く手を遮っている。頂上までの距離はまだ900m近くあり、時間的にも無理と判断し下山にかかる。最高到達点は5920mであった。7日BCへ下る」



「最高到達点からパプクカン頂上を仰ぐ」

一方の私はBCでひたすらじっと待つのみである。ここ数日、午前中は晴れていても午後からは降雪の日が続いている。アタック隊は大丈夫だろうかと気にかかってきた日の朝のことである。コックのパンカが私のテントの前で「ユキヒョウのアシアト!」と騒いでいる。確かにユキヒョウがいてもおかしくはない地域。滅多に現れぬユキヒョウが私のテントまで来たと言う事は、G・H・Tはもちろんパプクカン登頂もうましくい事の前兆かも?と思えてくる。何かにつけて人は縁起を担ぎたくなるものだ。

しかしながら翌朝、テントの前で黒々したものが私を見つめている。ユキヒョウか?と思ったがどうも怪しい。

「イヌだ!」ヤンマにいた牧羊犬のチベット犬だ。なんと昨日のユキヒョウの足跡は目の前のチベット犬に達

いない。がっくり、がっくり、パンカと大笑いした。

8日ヤンマ、9日ヤンマコーラ上、10日オランチュンゴーラ、11日イラダダ

8日間お世話になったBCに別れを告げヤンマへと下る。夕方からは雷とともに雪が降り始めテント周りを除雪するほどの大雪となった。翌日、ヤンマコーラ沿いの道を下る。小雪舞うなか石楠花林のテント場につくと往く時はまだ蕾だったのが、ちらほら真っ赤な花をつけ始めていた。10日もヤンマコーラ沿いに下る。谷沿いから山道の急登、崖につけられた階段の上り下りを経て、タモールナデの谷沿いに入ると荒れた道路に飛び出た。がけ崩れで寸断されている道路を2kmほど歩くと大きなゴンパが建つオランチュンゴーラ村に着いた。村にはすでに中国側から自動車道が通じ中国製の生活用品が入ってきていた。

11日メガワ付近で泊予定であったが、テントスペースが狭いためイラダダまで行く事になった。午後からは雷がなり雨が降り始める。道はアップダウン激しく、ヘトヘトになり宿に辿り着いた時には薄暗くなっていた。明日は車が入るレレップだ。レレップまで行けば車でタプレジュン、いよいよ歩くのも明日までだ。

12日～14日レレップ、15日～16日タプレジュン、17日イラム、18日カトマンズ

レレップまでは穏やかな道だ。標高が下がるにつれ春めいた陽気が漂ってくる。畑には大麦が揺れ、のどかな農村の風景が目にはやさしい。昼すぎにレレップ到着。もう歩かなくてもいいんだと思うとうれしい。車の手配で3日待つことになったが、ここまで辿り着いた苦労を思えば大したことでもない。

13日夕飯を食べていたら、「ハッピーニューイヤー」と乾杯が始まった。今日はネパールのビクラム暦でのお正月らしい。ポーターの踊りに我々も混じって久しぶりの楽しい宴会となった。15日ジープでタプレジュンに向かうが、乱暴に削ったばかりの悪路に車はひっくり返らんばかりに大きく揺れる。整備された道路にできるまでは生きた心地がしなかった。

タプレジュンはコロナの非常事態宣言で多くのホテルが閉鎖中であったが、かろうじて営業していたリゾートホテルに転がり込むことができた。予想に反して料金は激安、料理もおいしく、シャワーもお湯がでる。ああ～、ようやくG・H・Tが終わったんだと一息ついたが、まさかこの先、前代未聞のロックダウンで帰国できない事態に陥るとはいったい誰が知ろうか？である。

2日後カトマンズへの通行許可書を役所で得てすぐに出発。イラムで仮眠後先を急ぐが、なんとまああきれ

たことにカトマンズまでに計63ヶ所の検問があった。カトマンズに入るといつも大渋滞の道路はガラガラ、人も歩いていない。ホテルも閉鎖、店もクローズ、国際線もストップ、厳格な外出禁止令で街は取締まりの警官だらけ。異様な光景に状況がのみ込めないまま、今回G・H・Tの手配をさせていただいたコスモトレック社に到着した。有難いことにコスモトレック社の大津社長のご厚意に助けられ、社屋に寝泊まりができるようになったが、国際線フライトの再開はロックダウンのたびたびの延長で目途がつかず、体操、洗濯、読書、スマホでの連絡、これの繰り返しの毎日を過ごすはめになった。

カトマンズに入って27日目、待ちに待った帰国便が5月15日、成田直行のチャーター便としてフライトとなった。長い、長いG・H・Tの山旅のあとに、これまた長い我慢の軟禁生活。世の中なにが起ころかわかんもんだわい！日本を発って2ヶ月半、ようやく私のG・H・T山旅の修行が軟禁生活のおまけつきで無事終了となった。

末筆ながら、ヘルプを頂いた多くの方々に心より感謝を申し上げるとともに、今後の各ステージの壮大な山旅への参加とご支援を切にお願いし、グレート・ヒマラヤ・トラバース 1stステージの概要報告とさせていただきます。



「お気に入りとなったトンパを飲む3人」



「ロックダウンでガラガラのカトマンズ」



編集後記；今回から編集を担当する小川和敏です。何分にも不慣れなものですから至らない点が数多く散見されるかと思いますが、何よりも多くの記事を書きたいとの思いから、文字の大きさと行間の間隔を可能な範囲で最小にしてみました。以前に比べ見にくくなり恐縮です。皆さまのご意見を戴きながら、より良い「支部だより」にしていきたいと考えています。宜しくお願いいたします。

因みに、津田沼のヨシキスポーツさんには役員会会場の提供ほか、千葉支部として大変お世話になっています。山用品を購入するときは是非ご利用して頂きたいと思います。会員になると割引があります。